笹物語

物部村史によると、笹村は村の北にそびえる山(矢筈山)をササハゲといい、全山に木が生えず笹のみであるので村名を「笹」というようになり篠の字を用いたこともあると記されている。
笹は昭和のはじめまで高知～徳島間の往来が多く、徳島から来る人は煙草を背負って来て、物部のカライモで作る焼酎と交換した。
明賀には木賃宿が二軒あり、そこで泊まって各地を巡った。
笹の普賢様の夏祭りには祖谷や豊永からも参拝者で大いににぎわい、夜を徹して踊り明かし若者の交流の場となっていた。

権現岩(冠岩)

中番にあり、権現様をお祭りしている。
槙山の六部行者(日光院)が弟子とともにここを通りかかり、弟子の法力試しに「あの岩を割ってみよ」と言いつけた。
弟子は錫杖で岩を打った瞬間に火煙が上がったが割れなかった。
次に日光院が錫杖を振り上げると大岩はすさまじい音をたてて二つに割れ、半分は下に転げ落ち、残った方が今の権現岩となっている。

公会堂のあたりから迫力ある岩が見える。

昔は祖谷にある国有林も木材生産を行なっていた。谷道に製品事業所があり、人も多く暮らしていた。食料品などは徳島方面から入ってきていたが、酒だけは高知の酒が必要で、若い者が四里半(約18km)を峠を越えて明賀の店屋まで買い出しに来ていた。酒は酒入用の水枕に入れてもらい多い時は一斗五升もの酒を背負って峠道をあえぎながら、ことこと一日がかりで運んでいたという。(槙山のそら)より

大規谷北平国有林

物部は林業、養蚕、炭焼き、楮、三椏が主要産業であり、棚田・畑で一年分の米や穀物、野菜を作っていた。しかし燃料革命により炭が、木材輸入自由化で林業が圧迫され、和紙から洋紙への製紙工業が変わることで、一気に山で生活することが難しくなり、仕事を求めて次々と山を下り、人の住まない集落があらわれるようになった。

山から人がいなくなるということは山で育まれた文化とか、風習とか伝えられてきた知恵や技術、屋号はもちろん、地名までも、とても大切なものが消えようとしている瀬戸際。

壱瀬

山中にある石垣群におどろいた。
何段にも石を積み田畑を拓き人家の跡が何軒もあった。
物部では昭和30年代の高度経済成長に逆行するように、山から平地へ人が下りて行った。
山を下りる時、子や孫のためにと植えたスギ林におおわれて、下から見上げても人の営みの跡さえ見ることはできない。
残された家の軒下に昭和34年の木材新聞がそのままあった。
この年からここでは暦をめくる人が居なくなり、時が止まっている。

石垣を積んだ段々畑ではカライモが生産されていた。
カライモは焼酎の原料になり、各家では密造酒が作られていた。
行政は「収税」という人を派遣して取り締まりを行なったが、収税が来るという情報は瞬くまに広がり、山や谷などの隠し場所に酒を隠した。
取り締まる側の巡査も村人に酒をもらって飲んでいたので、ほとんど効果はなかったそうだ。
米の生産量の少ない山間地域ではどぶろくを作る家はあまりなかった。
(新、槙山韮生風土記より)

深いスギ林の中の人が通らなくなった山道を歩く。
ここが栄えて人々が山を拠り所として暮らしていた昭和を思いながら、不確かな未来へ進む。

NO.151
2024.7.7
七夕